
Monster・Hunter・Nightmare ~ 紅竜の唄 ~

詩守

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Monster・Hunter・Nightmare 〈紅竜の唄〉

【Nコード】

N0320C

【作者名】

詩守

【あらすじ】

初めまして。これはモンスターハンターと言うゲームの二次創作（FF）です。下書きにMHを使っていますが、殆どオリジナルの場面もありますので、読む方によっては不快な思いもするかもしれません。

プロローグ（前書き）

文章能力向上計画第一弾始動。

プロローグ

後の世の者は、この荒々しくも眩しかった数世紀を振り返り、こう語る。

大地が、空が、そして何よりもそこに住まう人々が、最も生きる力に満ち溢れていた時代であった、と。

世界は、今よりも単純に出来ていた。
すなわち。

狩るか狩られるか。

明日の糧を得るため、己の力量を試すため、またあるいは富と名声を手に入れるため、人々はこの地に集う。

- 【モンスターハンター】より引用。

ブログ（後書き）

読んでいただけて幸いです。

前書きに書いたとおり、文章能力を上げるための習作なので、評価を辛口でお願いしたいです。

File #1 (前書き)

長ったらしい上に本編にすら入って無いと言うへたれっぷり。許して下さい。

File #1

File #1

*

少年は小さい頃から感じ取っていた。

齢五歳にして大人達が見えない物を見ていた。

―龍がそこにいるのに。

少年には見えている。ビルが連なる街に隠れる様子も無く闊歩する”龍”の姿が。

しかし、大人には見えない。

いくら話しても聞いてくれない。

少年はこう理解した。

大人には見えなくなるものなんだ、と。そうして少年も、世の中を学ぶに連れて龍の姿など見えなくなっていくた。

そう、この間までは。

*

始まりは確か一月程前。きっかけはほんの些細な物。

僕がただの高校生だった時。

入学して間もない頃、仲が良い訳でもないクラスメイトが持ってきた雑誌の切れ端。

「見てみるよ、コレ」

男子が回りに集まり、その生徒を囲む。何事だ、一大事でもあったのか？、等とざわめき立つ。

「静粛に」

その一言の後に読まれた短い記事。

『 開発中の体感型ゲーム試作品の完成 』

約二年ほど前、滞ってきたゲーム業界に多大なる影響を与えた体感型ゲームの試作号が開発された。

体感型ゲームとは。

空気を肌で感じ、香りや感触、視覚までもが再現されるゲームである。

現時点で、開発を同時に進めていたゲーム会社「CAPCOM」が人気アクション大作「モンスターハンター」のβテストを募集している。

応募年齢は十三歳～三十歳までの健康な人。

詳しくはココへ <http://>

記事は微妙な所で切れていた。群集は、それがどうした、だからなんだと喚いている。

「まあ、待て。実はだな、都合の良い事にうちの叔父がこのゲームの開発に当たっててな。ここに五枚、テストの券がある」

そこで言葉を切った少年。

名前は確か……トウドウ 藤堂 マキ 真希。

明るく活発で、クラスのムードメーカを担当している。僕とは正反對の性格であり仲も良くないし、向こうが僕の事を知っているはずも無い。

そもそも、僕は人と接する事があまり好きではない。

僕……カリエ 狩獲 リュウカ 龍歌は直ったものの、昔は対人恐怖症だった。

小さい頃に”何らかの理由”で虐められ、小学校生活の半分を家の暗い個室で過ごした。

そして同時に、”あいつらなんかに負けたく無い”と言う理由から、空手を始める。

今でこそ、【狩人】の称号を与えられるほど畏怖されるが、未だに人と接するのは怖かった。

思い出に浸っていると藤堂が喋りだした。

「いや、な。皆にも分けてやりたいんだけどさ。やっぱ誘いたい友

達っているじゃん？ 俺とそいつで二枚だから後三枚が残るって訳。それで勘弁してくれよ」

どうやら、親父ならもつとテスター券を寄越せだとか、勝手な事を言われてるんだらう。

少し……哀れだな。

僕は興味が無くなり、始まりそうになった”じゃんけん大会”に参加するのも面倒だったので、その場を後にした。

*

行き先は屋上。

悪の溜まり場と言われるそこは、龍歌の貸切になっている。入学早々、喧嘩で勝ち取った領域^{テリトリー}だ。別に好き好んで喧嘩をした訳では無かったが。

屋上にふらりと立ち寄ると、女の子が暴行されそうになっていたのも、そこにいた十人ほどを病院送りに。

女の子の証言もあり、龍歌に罪は問われなかったが、学校と不良に睨まれる事になった。

……あんま気にして無いけどな。

龍歌の城であり、唯一の居場所と感じられる場所。龍歌に用があれば大体ここに人が来る。不便はしないのだが、無駄に広い空間が孤独感をより一層強くする。

給水タンクの上で寝そべり空を仰いだ。

蒼く、何処までも澄み渡り、伸ばせば届きそうな綿雲。

人は何故飛べないのだらう？

子供の頃からの疑問。

その疑問は、少年の心^{ハート}に火を付け、生物学、幾何学、そして哲学を理解させた。結局、人は空を駆ける事など出来ないと分かったのだが。

ガチャリと下で扉が開く音になる。

誰だ？

体を起こし、来るべき人物に備える。

……藤堂？

そこにいたのはさっきまで教室にいた藤堂真希だった。

「何か……僕に用か？」

予想外の人間に僕は不信感を顕わにし、一方、藤堂は困った様に頬を掻く。

「いや、な。お前に言いたい事があって、さ」

一応その言葉を聞き、警戒心を緩める。

ほつとしたのか、いつもとは全然違う調子で話します。

「妹が……世話になった」

「は？ 僕に女なんかないぞ？」

「や。そつちじゃ無くてだな」

藤堂は頭を振る。括つてはいるが、長い髪がバサバサと乱れる。

茶色の髪が日の光を吸い、キラキラと輝いた。

「入学時にさ、女の子助けてくれたじゃんか。あれ、俺の双子の妹でさ……お礼言いたかったんだ」

照れているのか、下を向きながら藤堂は続けた。

「妹もさ、ちゃんとお礼してないみたいだったから、今度の日曜日お前を家に招待したいんだ」

「すまないけど……僕はお礼目的で人を助けたわけじゃないし……」
言いかけて止めた。

考えてみれば、俗に”不良”と呼ばれてもおかしくない僕に声をかけたのだ。かなりの勇気がある行為だったのだろう。その事も一応配慮して、このありがた迷惑を受ける事にした。

*

……でけえな、おい

藤堂に招待されてから三日。地図を片手にあっちへトコトコ、こっ

ちへコロコロ。とうとうたどり着いた先には大を通り越して神クラスの豪邸。

「あー……あそこまで歩いたら二kmはあるんだろうな」

ぼそりと呟くと、目の前の門から声が響いた。

「お入り下さい」

ギギギギと鈍い音をさせながら門は開いた。

なんだろう？

世界が違う、と表現しても過剰じゃない。

新緑が支配した世界。

眼前は手入れの行き届いた芝生の道、右手にはとろろが出てきそうな森。

「混沌カオスだなこりゃ」

地道にこの道を攻略しなければならぬと思うと、帰りたくなってきた。

さて歩き出そうかと言うときに、前の方から小さな車がやってきた。

ゴーカート、だっけな？

ゴルフの移動用の車が猛スピードで走ってくる。

あ。やべえ、殺やられる。

と、思った瞬間目の前で急ブレーキ。

眼前で、という言葉は決して比喻ではない。三cmで僕は命拾いした。

「お迎えにありがとうございました」

命の危機を感じた僕は、とっさに逃げようとする。ガシリと腕を掴まれ、車の座席に座らせられる。

この女アマ無茶苦茶力強い……

ゴーカートは何も無かったかのように急発進した。

*

この屋敷を説明しようと思えばこの言葉が相応しいと思う。

金、金、銀、金、金、金。

ゴージャスってね、バランスが取れてるから美しいんだよ？

少なくとも、家の柱を純金にしてみたりとか、子供の顔を描いた絵だけで展示室を作ってみたりとか、しないから普通。

案内されたのは小さな部屋だった。

いや、さっきまでの空間を見ていたから小さく見えるだけあって、広さは客間としては広い方に入る、絶対に。

生理整頓された綺麗な部屋。ふかふかのソファがあるので腰掛けて藤堂を待つことにした。

二分後、慌てて駆け込んできた藤堂を軽く罵る。

「危うく死ぬところだった」

「あれは……残念だけど俺にはどうしようもないんだ……分かってくれ」

泣きそうになりながら弁明する。

まあ、許してやるか。

「で、だ。僕が今日呼ばれた理由が知りたい」

そう。

普通なら、感謝の礼を二言三言述べればいい筈だ。

しかし、藤堂はわざわざ僕を家に招いた。

その理由が知りたかった。

「や、さ。この間渡し損ねたんだけど……」

取り出されたのは小さなプラスチックカード。

……どこかで見た事があるような。

「父が開発に当たっていたゲームのβテストの話はしたよな？」

「嗚呼。確か、『モンスターハンター』のдар？」

「お前に、さ。父から直接ね」

ゴルドのカードをずっと差し出される。表面には【MH】の文字。裏には極薄のチップが付いている。

「後、本題なんだが……」

「まだ何かあるのか？」

「妹が隣の自室で話がしたいって言ってるんだ」

大きな溜息をつく藤堂。

「惚れた、みたいだぞ」

「さて、帰ろうかな」

「あ、待て。逃げられたら俺が……俺が、な？」

ガシリと肩を掴まれ、涙目で訴えられる。

……やばい、こいつを見てるとだんだん哀れに思えてくる。

しかしだ、ここで情に飲まれてはいけない。

さて、逃走を謀ろうとドアノブに手をかけた瞬間だった。

「お兄ちゃん……お茶……」

目の前で開くドア。

向こうは、僕の姿を見ておどおどしている。一方僕は不謹慎ながら眼の前で佇んでいる少女に見惚れていた。

少女は小柄で華奢と言う印象を受けた。でも出る所は出ている。細くサラサラ揺れる純金の髪。左は紫紺、右は蒼色の眼。一度見たら忘れられない特徴の顔だ。

何より、顔立ちが整っている。黒髪、黒目でもかなり美人だろう。お盆の上のお茶がカタカタ揺れる。やはり、僕を見て怯えているのだろう。

ふうと溜息を付き、少女を見る。

怖がられてんなあ……

少女はお盆を近くに置き、不意に飛び付いて来た。

「あぎやあつ」

僕は、そのまま後ろにバランスを崩した。

「あー。な？ 龍歌」

藤堂に名前と呼ばれた事より、抱き着いて来た娘のものが腕に当たり、それ所では無い。

……やべえ、今離したら少し後悔する。絶対。

僕の鋼鉄の理性と、野獣の本能が頭の中で葛藤する。なんとか理

性が勝った。チッ。

「とりあえず離れて」

ゆっくりと離れる。

うん、愛らしい。

困った様な悲しい様な表情をして、ぼそぼそとごめんなさいと謝る。

「いや、いいよ。で、僕は帰っていいかな？」

や。実際、足が既に出口に向かっている。

「まあ、待て。晩飯食っていかないか？」

「やだ」

「即答かよっ！」

藤堂は思わず「突っ込み役だったZ e」と言う顔をしてうなだれている。突っ込み役だったんだな。知らなかった。

「流石にそこまで謝礼を受ける必要も無いだろ？」

僕は言い繕う。

すると、後ろから裾をキュツと引つ張られた。そこには泣きそうな少女。と言うか、まだ名前聞いて無かったな。

やれやれ、と僕は肩を竦め、口を開いた。

「分かった、食っていくよ。ただし、だ……」

更にこう付け加えた。

「君の名前を覚えてくれたらね」

*

目の前にあるのは、フランス料理。

目の前に座っているのは藤堂真希。その隣は双子の妹の緋澄^{ヒスミ}ちゃん。で、僕の横に座ってるこの髭、誰よ？

僕の横には、ご立派なヒゲのオッサン。

料理に舌鼓をうっている。

「真希。このヒゲ誰だ？」

僕らは、互いを下の名前で呼ぶ事にした。

真希は「お兄ちゃんでもいいぞ」と言っで殴られた。勿論、緋澄ちゃんに。

「ぶっ」

「きたねえ」

「ふむ、君が緋澄のフィアンセかい？」

唐突にヒゲが口を開いた。

「なんだヒゲ、喋れたのか？ そうだと言ってみたいけど違っんだな」

「なかなか元気では無いか。ただの怪力馬鹿では無いようだな、え？」

「そりゃ、ありがとう。」

ニッコリ笑う二人。目が笑っていない。

「親父、いい加減にしないと緋澄が怒るぞ」

藤堂が慌てて仲裁に入る。……どうでもいいけど妹に頼るなよ。

「おおっと。それはいけない。命に関わる」

え？ いいのか、それで退くのか、オッサン！？

「いやあ、良い婿を見つけたな緋澄」

「おいヒゲ、人の話聞いて無いだろ」

「ヒゲでは無い、藤堂 総々（フサフサ）だ」

ネタ？ その名前はネタなのか？

と言っか、藤堂っで……

「真希の父親か？」

「そうとも、真希は我が家が誇る息子。緋澄は私が誇る世界一の娘」
……ほう。

「似なくて良かったね。緋澄ちゃん」

ニッコリ微笑みながら話を振る。そして、予想通り。

「……こくり」

と顔を縦に振った。

「のおおおっ！」

うおっ、ヒゲが頭を抱えて叫んでいる。

「そうともっ、我が子たちは母の真澄に似たさ。二人共なっ」

キレた。最近、巷で流行りの『キレた親父』だ。

「さて、そろそろ飯食ったし帰るかな」

僕は立ち上がる。

「あ、そうだ。明々後日休みの日だろ？ 体験がその日だから忘れないようにな」

「行くなら、な」

「送るよ」

僕ら二人は藤堂家をいそいそと出た。発狂したヒゲを置いて。

*

「ありがと、家ここだから」

歩いて10分弱。

「結構近いな」

「嗚呼。んじゃ又明日」

手を降って別れる。

僕は、そびえ立つマンションのオートロックを開け、部屋までふらふら歩く。

……今日は疲れたな。

そして、ベットになんとか辿り着き、深い眠りについた。

F i l e # 1 (後書き)

力不足ですね、ハイ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0320c/>

Monster・Hunter・Nightmare ~ 紅竜の唄 ~

2010年10月9日00時21分発行